

ウチの うちやま新聞

Vol.3 生活・教育インタビュー編

テーマ これからも暮らしたくなる有田を考える

佐賀銀行跡地を活用するにあたって、新聞第2号にて扱った「窯業と観光」という視点だけではなく、「有田に生活する人にとっても便利」といった視点も欠かせません。そこで『ウチのうちやま』新聞第3号では、「これからも暮らしたくなる有田を考える」と題して特集を組みました。あわせて、10月中旬以降に本特集に関連したワークショップの開催を予定しています。詳細は、後日、回覧板やInstagramにてお知らせします。

Interview

本特集では、有田内山グランドデザイン検討部会から挙げられた「生活」「教育」に着目し、検討部会から3名、あるいはそれぞれの活動に関わりのある3名の方々に、「佐賀銀行跡地の活用を踏まえた有田ならではの教育・子育て、生活のあり方」についてお話を伺いました。

原田祐馬氏 | UMA/design farm

長田加奈恵氏 | OKURA WORKS

花田宇利氏 | ラッキーソックス

松尾嘉之氏 | 有田小学校
学校運営協議会 会長

今道公利氏 | 有田小学校 教頭

中村洋子氏 | 趣味の店「有田んもん」

01 検討部会の協議を踏まえて考える



原田祐馬氏 | UMA/design farm

Harada Yuma

有田内山グランドデザイン検討部会は、地元の若手や中堅により構成され、「地域課題とその改善策」について協議を重ねてきました。そこで今回、協議の進められ方や出された意見について、外部の視点からアドバイザーを務められた原田祐馬さんにお話を伺いました。あわせて、意見の集約を踏まえた跡地に対するお考えも伺います。

テーマ① 検討部会での協議について

地域課題の把握と共有を重ねた協議 そこから得た数々の現実的な意見

ー検討部会では、どのように協議が進められましたか？

原田 最初は、地域の方々に事前インタビューを行い、それぞれが抱える課題感の把握から着手しました。その結果をもとに、検討部会で集まった皆さんとワークショップ形式で議論を行いました（下記写真1,2）。第1回は「家・生活と教育」、第2回は「仕事」をテーマに設定し、課題の指摘に加え、「こうあったらいいのに」とか「現実是这样なんです」といった話も伺いながら、“実際の課題感を共有する時間”を繰り返し設けてきました。



写真1 部会協議の様子(2021/0604)

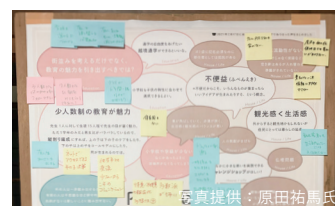


写真2 パネルを用いて課題の共有

ー生活軸の話は、当初から出ていたのでしょうか？

原田 インタビューを進める中で、窯業や観光の従事者はたくさんいますが、その基盤には生活があるということに気づきました。伝建地区としての魅力はある一方、そこに住み地域を支える人々の居場所が少ないという感覚がありました。だからこそ、具体的に語りやすいよう、仕事がメインの話だけではなく、家族のことやゴミ出しといった日常の小さなこともたくさん伺いました。

ー参加者からはどのような意見が出ましたか？

原田 全体を通じて、とても現実的な意見が多かったと感

じています。中には、必ずしも前向きな理由で有田に帰ってきたわけではない方もいたかと思いますが、教育や仕事、生活のことになると、「それがどういう場所になればいいか」というところに、結実している意見がいろいろと出されました。教育面では、子育て世帯が積極的に参加し、有田町が力を入れるデジタル教育だけでなく、「越境教育ができる」と子どもの特性に合わせて学校が選べる」といった身近で魅力的な意見が寄せられました。仕事面では、「町内に自分がやりたい仕事がない」という声や、内山地区に物件を借りている方からは「ハレの日なのに自分の活動に使えないこともある」といった生々しい話もありました。

まずは地域のための場所に それが観光に繋がるのが望ましい

ー佐賀銀行跡地に対する意見などはあったのでしょうか。

原田 今、有田にない場所であれば欲しいという思いはある一方、観光への疲弊感も見受けられました。生活の基盤が十分に整っていない状況で、人ばかりを呼ぶことに対する疑問があると考えられます。そのため、「観光の拠点として」という考えより、「まずは地域住民のための場所とし、それが観光に繋がるのであれば望ましい」という意識が強かったように感じられました。

テーマ② 意見の集約を経て、跡地を考える

有田に住む方にも訪れる方のためにも 社会教育的な要素が必要なのは？

ー検討部会での意見集約を経て、跡地に対するお考えをお聞かせください。

原田 建つ施設が有田の方々のためになることは、結果的に有田を訪れる人の満足度向上にもつながると考えます。そういう意味では、社会教育的な要素が入ると大きく変わると思います。個人的には、図書館の分室のような場所がよいですね。窯業関連の本からベストセラーまで、地域の方が読みたい本を手にとれる場。そして、もう少し背伸びするとしたら、デジタル情報資源にアプローチしやすい環境を整え、今の子どもたちが学校での学びをさらに深められることが理想的です。陶器市の時には、地域へ開かれた

活用も良いですが、日常的には、生活に根ざした場であるべきだと思います。

ーそれを社会的かつ観光的に、どのように開いていくと良いのでしょうか。

原田 図書館はすでに、社会教育施設でありながら観光的施設にもなっていると思います。建物そのものが観光的資源にもなり得るため、「どのような建築を作るか」が非常に重要です。無理に派手なものを作る必要はありませんが、コンテンツと建物が息を合わせるような建築が生まれると、日本中から「どんなものだろう」といろいろな人が見に来るのではないのでしょうか。図書館的な機能を備えつつ、誰もが情報に自力でアクセスしやすい場が、町と人を繋ぐ接点になると考えています。

テーマ③ 外から見る有田の未来像

業としての面白さを活かしつつ 宿泊・工芸・食でさらなる魅力を

ー客観的に有田の外から見た場合では、有田がどのようになるとより良くなるとお考えですか。

原田 伝建地区という見方で言えば、いろいろな人の視点での“まちの歩き方”がわかる拠点になると良いのではと思います。個人的には、有田ほどの規模感であれば、やきもの産業として見るのも面白いと思います。特別な技術を伝える場は九州陶磁文化館がありますし、もちろん個人で頑張っている方も多くいますが、もともとは“業としての面白さ”がある場所だと思っています。ですので、町の構造やものの流れがどういう風に出来上がったのかを知ることとは、非常に興味深いはずです。また、「訪れる方の興味関心がどういうところにあるか」を踏まえた誘導も重要です。車を停めた後に、最初に出会うサインで、「あなたの興味はこっちだよ」と案内できれば、まちの回り方は大きく変わると思います。さらに、有田は宿泊や工芸の体験、美味しいご飯も食べられると、さらに魅力が高まると思いますね。しかし、現状では、飲食店が非常に少ないと聞いています。観光客だけではなく地元の人も食べにいく機会を増やすことが、地域経済を回し、飲食店の増加にもつながると考えます。宿と工芸とご飯、この3つが揃えば、有田はもっと魅力的な町になるはずですよ。

02 日常の中に有田での子育ての魅力を



長田加奈恵 氏 | OKURA WORKS

Nagata Kanae

これからの有田を考えるうえで、今暮らしている方々の声に加えて、「次世代を担う子どもたちにとってどのようなまちであってほしいか」という視点も大切です。そこで今回、有田の子どもたちが、有田町や佐賀銀行跡地でどのように地域と関わり、有田を体験してほしいのかを考えるべく、部会メンバーであり、子育て世帯の2名の方にお話を伺いました。

テーマ① 都会に出て気づいた、有田の特徴

子どもを育てたい場所が「有田」だった

ー Uターンで有田に戻られたそうですが、それまでの経緯を教えてくださいませんか？

長田 私は有田町の出身で、専門学校への進学を機に東京へ出て、そのまま東京のウェブ会社に就職しました。その後、結婚を経て夫の転勤で福岡に引っ越して子育てをしていたのですが、再び転勤で東京に戻る話が出て、そのタイミングで東京と田舎の環境を比べてみたんです。東京で働いていた企業では、似たような暮らしぶりや価値観で育った人たちが多く、取引先の人など、さまざまな年代の人とコミュニケーションを取らないといけな場面になると、難しさを感じることがありました。一方で、私が育った有田では、日常的にいろんな年代の人と接する機会が多く、コミュニケーション能力が高い人が多いなと感じます。どちらで子どもを育てたいかを考えたら、子どもの時は田舎の方が良いと思い、有田へのUターンを決意しました。

教育活動も有田で住むことの魅力に

ー東京に出てみて、有田の教育でここは独特だなと思うことはありましたか？

長田 有田では、どの小中学校にも窯があり、年に数回、地域の先生を招いて、成形から絵付けまでを体験する授業があります。完成したやきものには、学校によっては校長賞や柿右衛門賞などの賞がつけられ、選ばれた生徒は、お皿をもらえたりするんです。ですが、有田では、こうした取り組みが普通すぎて、子どもたち自身があまりありがた

みを感じていないようにも思います。

ーお子さんの作品は、どこかで展示があるのでしょうか？

長田 基本的には校内で行われていると思います。ただ、たとえば、佐賀銀行跡地などで展示されていると、子どもたちもきっと嬉しいでしょうし、「〇〇賞もらったよ」といった話題が地域や家庭の中で広がっていくのではないかと思います。有田ならではの教育活動が、外からも見えるようになると、有田に住むことの魅力がもっと伝わるのではないのでしょうか。

テーマ② 子どもに見てもらいたい姿

日常的にオープンな環境だからこそ いろんな生き方を見てほしい

長田 有田のオープンな環境も魅力の一つだと思います。東京に住んでいた頃、近所の神社でお祭りのような行事が行われていましたが、地場の人たちだけで行われており、中には一切入れてもらえない雰囲気がありました。一方で、有田の「おくんち」のような地域行事では、人が足りないこともあってか、移住者でも「出るよね！」と声がかかり、半ば強制的にでも誰でも参加させてくれます。そうしたオープンな環境を通じて、夫は以前より社交的になりましたし、子どもも少しずつ地域への愛着が湧いているように感じます。また、有田には自営業の方が多く、面白い大人たちが身近にたくさんいます。そういった方々が自宅に遊びにきたり、日常の中で子どもたちと接点を持つことで、「いろんな生き方をしているんだ」と思わせてくれる環境があることも、有田の小さな魅力だと思います。

テーマ③ 佐賀銀行跡地に期待すること

子どもと高齢者の居場所にもなる図書館

ー佐賀銀行跡地に期待することがあれば教えてください。

長田 たとえば、図書館のような場所ができると、子育て世帯としてはとても助かります。子どもが家にいるとどうしてもゲームばかりになりがちですが、図書館であれば、「涼しい場所で宿題しておいで」と親は安心して送り出すことができます。また、暑さで外に出るのが難しい高齢者にとっても、日中にふらっと立ち寄れる一時避難所的な居

場所になるのではないのでしょうか。もし、そこで子どもたちがゲームをしすぎていたとしても、地域のおばちゃんたちが「ちょっとやりすぎよ」と声をかけてくれるような場所になるといいなと思います。

03 自身を実験台に、好きな場所でやりたいことで生きてみる



花田宇利 氏 | ラッキーソックス

Hanada Hirotohi

テーマ① U ターンのきっかけ

都会に出て気づいた地元有田の魅力

ー U ターンで有田に戻られたそうですが、それまでの経緯を教えてくださいませんか？

花田 私は有田町の出身ですが、大学進学を機に東京へ出て、そのまま東京で雑誌編集の仕事に就きました。取材でさまざまな地域を訪れる中で、地方では生活と仕事が密接していて、そこで生き生きと暮らしている人たちにたくさん出会い、そこから私も地元に戻って生活をしたと思うようになりました。その後、独立までの準備期間として、取材先で懇意にしてもらった大阪の企業に転職し、2016年に有田に戻ってきました。そして現在は、本町で「ラッキーソックス」という靴下のお店を営んでいます。

テーマ② 子どもたちに感じてもらいたいもの

それぞれの経済があって、安心して暮らすことができるような環境に

ー 有田に帰りたいけど、仕事や環境の制約で帰ってこれないという声もあるかと思います。実際に U ターンした立場として、どのように考えますか？

花田 雑な言い方になりますが、有田が発展したのも、やきものに適した石が幸運にも近くの山で見つかった、それ

を練って器を作ったら買ってくれる人がいて、次第にたくさんの方々がそのやり方を学んでやきものを作るようになりました。さらに、器を売る人がいて、それを支えたりお世話をする人がいて、それでみんなが暮らしていけるようになりました。その経済活動の連続が、結果としてこの町並みになって、それを見た誰かが歴史や文化と言うようになったのだと思います。そう考えると、モノでもサービスでもなんでも、まずは自分や家族が生活できる経済を考えたり、誰かのやり方を真似たりして、好きな場所でやりたいことを実際にやってみるといいのではないのでしょうか。その小さな経済がそのまま広がってもいいし、それを見た別の人が何かを始めて広がればそれでいいし、失敗したらまた新しいことをやればいいし、その個々の経済の連なりが次の町並みになっていくような気がします。子どもたちが「地元に戻ろうかな」と思った時に、働ける場所がある、自分で何かを始められる、安心して生活ができる、そんな空気が漂う町であつたらいいなと思います。「仕事がないから帰ることができない」ではなく、どうしたら自分がやりたいような生き方・働き方ができるのかという視点で、もっといろいろなやり方があるということを、私自身も実験中なので、その姿を見た子どもたちが、「自分にもできるんじゃないか、やってみたいな、あんな風にやるとダメなんだな」と感じたり、行動してもらえたなら、ちょっとだけ生きている意味があるかな？と思います。

子どもたちの未来のために、地域全体でワクワクするような循環が生まれたら

ー 今後取り組んでいきたいことがあれば教えてください。

花田 現在、ラッキーソックスの靴下は他県の工場で製造をしていますが、ゆくゆくは町内に工場を構えて私たちの手で作れるようになりたいと妄想しています。「有田で作っています」と言えると、説得力や安心感にも繋がりますし、そこで働きたい人がいれば新しい経済も生まれます。お揃いのユニフォームで、働く人の姿が見えるような明るい空間で、体験もできるようなファクトリーが理想です。それを見た若い人が「自分も何かやってみたいな」とワクワクしてくれたりすると、それが次の世代に繋がっていくのではないかと思います。さらに、この町には、特に子育て世

帯のお母さんの中に、たとえば何かを作るのが趣味だとか意外な特技や隠し技をもっている方が多いと感じます。ただ、そういう方が一からお店を持つことはまだまだハードルが高く、また気軽にチャレンジできる場所が少ないのも現状です。そういう意味でも、私たちのお店を使って、やりたいことを実践してもらって、そこで反応を見てから、次のステップに進むというような活用をしてもらってもいいですし、たとえば、佐賀銀行の跡地にもそういう場があってもいいのではないかと思います。もっと若い人や女性たちの活躍が自然であるというか、いろいろな人が自身のもっている可能性を試せる場所が増えていくといいなと思います。そうやって誰かの生き生きとした姿を見た子どもたちが、“自分もやってみたい”と思えるような、そんな循環が生まれるといいですね。

テーマ③ 佐賀銀行跡地に期待すること

住んでいる人にとっても便利な道の駅のような人の行き交う場所に

—ご自身の考えを踏まえて、佐賀銀行跡地に期待することがあれば教えてください。

花田 内山地区に住んでいて思うことは、日々の買い物に車で行くことが多く、近くで散歩のついでに買い物ができるようになればいいですね。近所の人も観光で訪れた人も通いやすい道の駅みたいな場所になると便利だなと思います。食べるスペースや日用品、お土産もあって、観光客も近所の人も地元で採れた野菜なんかが普通に買えたり、住んでいる人にとっても便利な機能があるといいなと思います。また観光も移住定住も、窓口はひとつにまとまってもいいのかなと思います。両方に熱意のある人やチームが、訪れた人に対して真摯に対応をする仕組みができれば、これも少しずつ良い循環に繋がっていくのではないのでしょうか。何より、有田に興味をもってくれること自体が嬉しいですし、私も有田焼はもちろん、この町の歴史と文化が大好きですから、そういった方々に喜んで帰ってもらうことが「また行きたい」「暮らしてみたい」と思ってもらうことに繋がるのかもしれないですね。

04

コミュニティ・スクール活動

現在の取り組みとこれから



松尾嘉之氏
有田小学校
学校運営協議会
会長



今道公利氏
有田小学校 教頭

有田の次世代を担う子どもたちにとって「有田だからこそできる教育」という視点は、重要な要素だと考えます。そこで今回、有田小学校で行われているコミュニティ・スクールの取り組みをもとに、これからの教育活動について考えるため、有田での教育に関わっておられる2名の方にお話を伺いました。

テーマ① 有田小学校学校運営協議会の経緯

地域と学校が連携した学校づくり 子どもたちにより豊かな体験を

—まず、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）立ち上げの経緯を教えてください。

松尾 もともとは、評議委員会のような形で、校長・教頭とPTA経験者2名の計4名で、学期ごとに話し合いを行っていました。それが10年ほど前に、町の方から「メンバーを増やしたい」という声があり、地域の方も加えて協議を行うようになりました。その後、文部科学省が推奨していた「コミュニティ・スクール※」について、有田小学校でも実施することとなり、地域と学校が一緒になって学校づくりを進める体制へと移行していきました。

今道 佐賀県には、“高い志と佐賀への誇りを持った、たくましい子どもに育てたい”という教育方針があります。それを実現するには、たとえば、やきものを教えるにも、教師だけでは限界がありますし、準備の負担も大きいです。そうした背景もあり、子どもたちにより豊かな体験をしてもらうため、地域の力をお借りしています。

テーマ② コミュニティ・スクールの活動について

「有田の子どもたちは特別なんです」 本物が身近にある贅沢な環境での活動

—コミュニティ・スクールの活動では、どんな活動をされているのでしょうか？

今道 たとえば、やきものの活動では、学年ごとにテーマがあり、花瓶や写真立て、置き物など、作るものはさまざまです。なかでも、松尾さんをお願いしている「風鈴づくり」は、まちとのつながりも意識した取り組みです。子どもたちには、「有田に来られた方に見られることを意識して絵付けをしてくださいね」と指導されています。完成した作品は有田観光協会に展示され、観光客の方にも見ていただける形になっています。

松尾 私が始めた「卒業絵皿」の取り組みも、平成9年から30年間近く続いています。当時PTA会長を務めていた私は、「このまま卒業したら、子どもたちが有田のことを何も話せないまま、東京や外国へ出ていってしまうのではないか」と感じました。しかし、有田で何かを体験していれば、たとえ15分でも自分の言葉で話せるようになる。そんな思いから始めたものです。その中で、「有田の子どもたちは特別だな」と感じるがあります。絵皿に書く絵柄は、子どもたちに全て任せていますが、波や龍など「これは普通書かないだろう」というような、絵柄が多いことに驚かされます。なぜだろうと考えたのですが、登下校の途中、子どもたちはお喋りしながらでも、ショーウィンドウに飾られたやきものをチラチラと見ているんですね。また、やきものを教える方が伝統工芸士や作家であることもあり、他の学校と比べて、本物が身近にあります。そのような贅沢な環境の中でさまざまな体験を重ねることが、子どもたちを特別にしているのだと思います。

「やきもののばかりが有田ではない」 だからこそ“本物に触れてほしい”

今道 やきもの以外にも、地域の方に加わっていただき本物に触れる取り組みがいくつかあります。たとえば有田小学校には、100年ほど前に当時の町や小学校の関係者と有志の方がドイツから持って来られたピアノがあり、他校から招いたピアノが上手な生徒や地域の方々、時には日本でも有名な音楽家を招き、子どもたちの前で演奏会をしてもらいました。また、動物を描く作家さんをお招きして、子どもたちのペットを1枚の絵に描いていただいたこともありました。

松尾 冬には、子どもたちに「本物を見せたい」という思いから、5メートルのクリスマスツリーを学校運営協議会

のメンバーで手作りしたこともありました。こうした活動の背景には、「やきものばかりが有田じゃない」という私の考えがあります。だからこそ、子どもたちには本物に触れてほしいと思っています。ここは芸術のまちであり、“本物を見せる学校”であるべきだと思っています。そうした思いから、活動の幅をさらに広げたいと考えています。たとえば、今後は学校運営協議会として、大山小学校とのコラボに取り組んでみたいです。大山小学校は農業の活動をしていて、上有田にはない田んぼがあるんです。だからこそ、暮らしの一部としてでも構いませんから、子どもたちが農業を体験できる機会があれば面白いと思っています。

テーマ③ 有田をテーマにした取り組みから発信へ

地域や観光客と触れ合いを持たせる 「陶器市遠足」の試み

今道 ここ2年ほどで、新たな行事として「陶器市遠足」を始めました。これまでの遠足先は、焔の博やダムなどでしたが、「それは有田でなくてもできるのでは」という話が上がったことがきっかけで、この活動を考えました。この遠足では、子どもたちにお小遣いを500円持たせ、お店の人と交渉する体験をさせています。また、お店の方には「どのようなことに気を付けて売られているのか」、観光客の方には、「なぜ有田に来られたのか」とインタビューをし、人との触れ合いを持たせるようにしています。

—インタビュー結果の発表等はされているのでしょうか？

今道 グループごとに内容をまとめて学級内で発表する場は設けています。しかし、これだけでは受け身になりがちだと感じています。そこで今後は、子どもたちが情報を発信することも必要かもしれません。

子どもたちによる有田の魅力発信

—仰るような発信が実際に地域の場合でもできると、より有田の魅力が伝わりそうです。こうした活動は、地域や移住を考える方々には、どのくらい伝わっているのでしょうか。

今道 コミュニティ・スクールが始まった当初から、「地域の方にも発信していかなければいけない」という思いが

あります。有田小学校の取り組みは、学校通信などを通じて保護者や地域の方々には知らせていますが、その他の外部の方にはなかなか届いていないのが現状です。たとえば、ホームページなどで、子どもたちが作成したインタビュー記事などを発信することで、さまざまな方に広く活動を知ってもらえるのではないかと思います。

—今後、オンラインでの発信が浸透したうえで、さらに佐賀銀行跡地のような「実際の場」を活用して、子どもたちの作品や企画を発表するような場も作れると、地域とのつながりをより深められそうですね。

テーマ④ 佐賀銀行跡地に期待すること

子どもたちも気軽に立ち寄れる道の駅のような場所に

—佐賀銀行跡地に期待することがあれば教えてください。

松尾 長くこの地域に住んでいる立場としては、結局スーパーが欲しいです。車を運転できる人はいいいですが、10年後、15年後に免許を返納した後も、そこで生活を営んでいくためには、スーパーやATMがあることが1番便利だと思います。

今道 観光客向けに体験ブースなどを設けるのもいいとは思いますが、それだけでは長続きしないかもしれません。やはり、地域の人にとって役に立つ機能が必要です。たとえば、有田は表で食事できるところが少ないような気がしますので、食料品を買えたり、簡単に食事ができる、子どもや親子が立ち寄れる道の駅みたいなところがあるととても良いと思います。

松尾 軽トラ市とかも良いですね。有田の西の方には、コンビニやスーパーがたくさんありますが、踏切から東の方にはほとんどありません。上有田の小学校の子どもたちが、気軽に買い物できる場所が少ないのです。

今道 たとえば、週1回でもよいので、果物や野菜、駄菓子などが集まった軽トラ市のような取り組みがあると、地域に住んでいる子どもたちも喜んで行くと思います。

※コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）：地域と学校が連携し、地域住民の声を学校運営に反映することで、地域に根ざした特色ある学校づくりを推進することを目的とした、学校運営を行う仕組み。（引用：文部科学省 HP, 2025 年 8 月閲覧）

05 物品販売を通じて考えたこと



中村洋子 氏 | 趣味の店「有田んもん」

Nakamura Yoko

平成 19 年から、内山地区に趣味の作品を集めたお店を構え、野菜販売も続けてきた中村さん。これまでの活動や、有田での長年の生活を通じて感じる、佐賀銀行跡地に期待することを、お店のご経緯などのお話から伺ってきました。

テーマ① 自身のお店について

有田の人の趣味作品を届ける「有田んもん」 お店であり、おばちゃんたちの居場所

—現在のお店の前は、別の場所でお店をされていたそうですが、始められた経緯を教えてください。

中村 以前は、商工会議所跡地の近くで趣味の店「有田んもん」という、“有田の人が趣味で作った作品”を委託販売するお店を、平成 19 年から 12 年間営んでいました。きっかけは、女性懇話会の催しで、観光客の方に建物を案内する傍ら、町内の方の趣味の作品の販売をしたことです。そこでは、たくさんの作り手と出会い、「売るのが欲しい」という声があることを知りました。その後、娘がアクセサリを作っていたこともあり、「作品を年中販売できるお店を開きたい」と思い、自分のお店を始めました。ただ、作品だけでは集客が難しいと考え、野菜やお花、お饅頭等も販売しました。

毎日来られる方もいて、 誰でも来てから喋って賑やかだった

—お店にはどういった方が来られていましたか？

中村 近所のおばちゃんたちが入れ替わりで 10 人ほど来られていましたね。時には「お昼までよかね」と言って椅子に座り、2 時間ほどお喋りされたりして、いつも賑やかでした。毎日来られる方もいて、中には、「家に一人でいたくないから」と言って、私のご飯を食べる間でも 1 人でお店にいてくれた方もいたんです。

—当時は周辺に住む方々の居場所にもなっていたのですね。そうした場が跡地にあっても良いのかもしれないですね。

テーマ② 宅配・移動販売の取り組みと課題

知られざる宅配・移動販売の現実 課題はあるものの、人と関わるきっかけにも

中村 しかし、高齢化もあって12年目にはほとんど来店がなくなりました。その後、借りていたお店の家主も亡くなり、閉店も考えました。その頃、娘夫婦が帰郷して、私の実家でアクセサリーの店を始めていたので、私もそこへ移ることに決め、今の場所で隣同士で再開店しました。しかし、まもなくコロナ禍となり、しかもお店は表通りから入り込んだ場所にあったため、来客は少なく、「ここでじっとしていても売れない」と思い、自身のためにも、毎週1回、野菜や食料品の宅配販売を始めることにしたんです。

—車を持たれていない方にはすごく助かりますよね。大変ではないですか？

中村 今は6軒の家を回っていますが、野菜を受け取ってくださるので、こちらこそありがたいんです。「中村さん、頑張るよね」とよく言われますが、「私も頑張るよ、楽しかもん」と返しています。こうした会話が元気の源になりますし、今では、週に1回の楽しみです。

—他にも移動販売はあったりするのでしょうか？

中村 はい。宅配の際に、教えていただいたことがあります。たとえば札の辻周辺では、深川製磁工場前に毎週水曜のお昼ごろ、前田陶助堂さんが来られて、陶助おこしや饅頭、乾麺、魚の天ぷらなどを販売されています（下記写真3,4）。また、井上酒屋さん前には、週2回ほど松浦の方からお魚や野菜を売りに来られる方もいるそうです。町内の魚屋さんも曜日と場所を決めて来られているそうです。ただ、私自身、宅配を通じて課題も感じます。1ヶ所では欲しいものが全部揃わないため、結局、他のお店にも行かなければならないということです。また、日用品に関しては、人によって好みがありますので、お店があっても必ずしも買いに行くとは限らないと思います。

—そうした課題はあるものの、中村さんのお店や宅配、他の移動販売は、地域の居場所となったり、人と関わるきっかけを与える大切な役割を果たしているように思います。



写真3 深川製磁工場前での販売



写真4 天ぷらや麺類などを販売

テーマ③ 佐賀銀行跡地に期待すること

駐車場の整備とともに、みんなのためになるお土産屋と休憩スペースを

—佐賀銀行跡地に期待することがあれば教えてください。

中村 観光地にとってなくてはならないのは、駐車場の確保だと思います。普段は駐車スペースとして使い、イベントの時は、現在行われているように、テントを建てて休憩の場にしたり、キッチンカーが来たりしたら、使い方は無限に広がり、楽しいと思います。もし、建物が建つのであれば、お土産物屋さんと道の駅とコンビニが混ざったような、超小規模で良いので、そんなお店があったら良いなと思います。建物は、なるべく小さくして、駐車スペースを広くとり、誰でも気兼ねなく座れるように外に椅子を置いたり、自動販売機を置いたり、さらにトイレがあれば観光客の方にも、地元の方にも休憩スペースとして喜ばれるのではないかと思います。急な雨や暑さ対策のためにも屋根があれば、さらに居心地が良いと思います。

あしがき

第3号では、多様な属性・世代の方々からお話を伺い、それぞれ異なる視点での意見をいただきました。有田の将来を考える上で、非常に参考になる内容だったのではないのでしょうか。冒頭でもお伝えしましたが、10月中旬以降にワークショップを開催し、皆様の意見を伺う機会を設けさせていただく予定です。是非、積極的なご参加をお願いいたします！詳細は後日、回覧板やInstagram等でお知らせします。

この新聞は、有田町との共同事業であり、共同事業実施費の助成を受けて発行しています。

Instagram

ID: uchino_uchiyama

新聞やワークショップの予告をします！



企画・編集：佐賀大学 理工学部 建築環境デザインコース
建築計画学研究室（担当：松田愛也）

デザイン：松田愛也 | イラスト：小佐田成美